

和語動詞の語義研究

——「すすむ・すすめる」「のる・のせる」の調査——

相 澤 早 帆

1. はじめに

日本語教育の現場における語彙教育とはどのように行われているのであろうか。筆者が勤務してきた日本語学校における語彙教育では、「語彙の授業」や「語彙の教材」はあるものの、学習者の自学に任せている部分も多い。そのため、「語彙の勉強」というと「予習・暗記・テスト」などというイメージが浮かび、苦手意識を持つ学習者も少なくない。また、教師側も「語彙の授業」で「何をどれだけ扱うか」「何を目的として授業を組み立てるのか」の明確な基準はないため、担当する教師も悩むことが多いと言えるのではないだろうか。

このようなことから本研究では、語の使用状況を調査し、教師は授業で教える必要性が高いもの・低いものを明らかにすることを、目的とする。そしてこれにより、学習者の「語彙の勉強」の負担を軽くすることが出来る可能性を探りたい。

2. 先行研究

2.1 和語動詞の習得

「語彙」と一言で言っても、その種類はさまざまである。

本研究では、和語動詞に着目しその使用実態を調べることとしたい。その理由として、和語動詞は多義であることが多いということが挙げられる。初級日本語では基本義を教えるが、中級以降では派生義を扱う。どの語義を教えればいいのかという明確な基準はないため、日本語教育の語彙教育においてしばしば問題となる。このことから、和語動詞の多義についての使用状況の調査は、本研究における「教師が授業で教える必要性が高いもの・低いものを明らかにすること」という目的にかなっているものだと考えた。同時に、日本語学習者にとっての和語動詞の習得、または多義性の高い動詞の習得の困難さ、および重要性についても指摘されている。

田丸（1998）は、非漢字系の中級中・後期学習者にどのような語彙の指導が必要なのかということ考えた。自身で語彙リストを作成し授業を行ったが、語彙リスト作成にあたっての報告で、動詞は分野をこえてかなりの一般性を持っていることを指摘し、かつ学習者が難しさを感じていたのは和語動詞群だったと述べた。田丸（1998）の見解では、和語動詞は単独では意味範囲が広く特定しにくいからだろうとされている。また、出現頻度の高い語で

あっても、抽象的な語と結びついて使われる場合が多く、具体的な身の回りの話題を中心に進める初中級の教科書では、その意味が取り上げられることが少ないようだと述べられている。

森山（2015）は中国語母語話者を対象に、文脈の中で和語動詞を正確に使用できるかどうかを調査した。結果の一つとして、動詞単語テストにおいて正しい漢字が書けたにもかかわらず、文脈の中で正しく産出できなかった語があることが述べられている。森山（2015）は、文脈の中で正しい動詞を使用させることの難しさを述べているが、特に基本動詞は多義性が高く意味範囲が広いので（Kellerma1979）、既習語彙であっても学習者にとって産出は難しかったと思われる（p.9）、とまとめている。

このことから、和語動詞の産出には、動詞の多義をどのように理解し、使用語彙とするかが重要な課題であると言えるだろう。

2.2 自動詞他動詞の語義

玉村（1992）が指摘するように、多義であればあるほど基本的な語となる。そして、その中には自動詞他動詞（以下 自他動詞）として対となっているものも少なくない。本研究の調査ツールとして使用した『基本動詞ハンドブック』でも自動詞と他動詞が対になっているものが目につく。そこで、本研究では分野別だけではなく、自他動詞別の語義の使用状況にも着目することとした。

そこで、まず自他動詞の対応についてまとめておく。自他動詞の対応については、奥津（1967）、寺村（1982）、早津（1987）などを始めとし、数多くある。語義の対応という点に集中してしてみると、早津（1987）は、有対自動詞と無対自動詞の意味的な特徴による分類も行っている。「物や人の性的な状態や性質を表す自動詞」「人の動作・行為・表情などを表す自動詞」など合計5つのタイプに分類し、有対自動詞に現れやすいもの、無対自動詞に現れやすいものなどを示しているが、これは早津（1987）自身が述べているように、動詞の多義性については考慮せず、動詞の基本的と思われる意味によって分類されたものである。早津（1989）においては有対他動詞と無対他動詞の意味的な特徴の分析がされているが、こちらでも有対他動詞は、「働きかけの結果の状態に注目する動詞が多い」（p.232）、無対他動詞には「働きかけの家庭の様態に注目する動詞が多い」（p.232）といったように、有対他動詞、無対他動詞の全体的な意味の特徴を明らかにするもので、それぞれの動詞の多義の部分については触れていない。

沼田（1989）では、自他動詞の対応は、形態論的・構文的・意味論的観点から捉えることができるとしているが、意味的対応について従来の研究では「自・他対立に必然的に関連する意義の特徴のちがいについて明確にすること」はなかったと述べている。（p.197）

沼田（1989）が焦点を当てた、自動詞・他動詞の多義語における「対応の欠落」とは以下のようなものである。

- (1) a. 太郎が船の帆をあげる。
b. 船の帆が上がる。
- (2) a. 娘たちが人気歌手に熱をあげる。
b.* 人気歌手に熱があがる。

どちらも沼田（1989）内で挙げられている例文であるが、多義語である「あげる／あがる」では、（1）のように意味的に見て入れ替えが可能なものもあれば、（2）のように入れ替えができないものもあり、このような「複数の意味・用法を持つ動詞がある意味では自・他動詞対応を持ちながら、他の意味では対応を欠くこと」（p.199）が対応の欠落だとしている。

3. 調査内容

本研究では、以上の先行研究を踏まえ、二つのポイントから調査を行うこととした。

まず、使用頻度という観点から指導が必要な語義、学習者が習得しておくべき語義を明らかにしたい。対象とする学習者は、森山（2015）で述べられていたように、中級以降の学習者は文を作る際に動詞を使いこなせないと正確に文を産出できないということや、田丸（1998）であったように大学・大学院で専門的な事を学ぶ際にも和語動詞が重要となってくること、また筆者自身が勤務する日本語学校が大学・大学院進学を目的とした学習がメインであること、といった理由から、日本の大学、大学院等で学ぶ留学生としたい。そのため、対象となる和語動詞をコーパスで検索し、大まかではあるが分野ごとに分析を行いたいと思う。

次に、自他動詞に着目した分析を行う。自他動詞間の語義の対応、特に沼田（1989）が述べたような対応の欠落がある語義の使用状況について、調査を通して明らかにしたい。

4. 調査方法

4.1 使用コーパスについて

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下 BCCWJ）を使用し検索ツールは中納言を用いた。BCCWJ は、検索時に検索対象のレジスターを設定でき、さらにそのレジスター内で詳細なジャンルを設定できる。今回は調査語の分野別使用状況を調べることを目的としているため、このレジスターを設定しジャンルも設定する必要がある、検索対象は、出版・雑誌／出版・書籍／ベストセラーとした。ジャンルは、「文学／芸術」「社会科学」「自然科学」を使用することとした。この三つのジャンルは、比較的使用する語や語義に差が出やすいのではないかと思われたこと、また、留学生が一般的に進学先として選ぶ学科（文学部、経済学部、理工学部 等）に近いのではないかと思い、設定した。

4.2 語義の選定について

複数ある語義の使用状況を調査することが、本研究の目的の一つであるが、そのためには

指標となる語義を何によって選定するのかを決めておく必要がある。そこで、国立国語研究所が公開している「基本動詞ハンドブック」をひとつのツールとして使用することとした。「基本動詞ハンドブック」(以下ハンドブック)はこの基本動詞の多義を解説しているツールである。しかし、1つのツールだけでは十分とは言えないだろう。そのため、その他5つの辞書と比較し、語義の整理を試みた。使用した辞書は以下のとおりである。

- 『三省堂国語辞典 第7版』(以下三省堂)
- 『新明解国語辞典 第7版』(以下新明解)
- 『明鏡国語辞典 第2版』(以下明鏡)
- 『現代国語例解辞典 第5版』(以下 現代例解)
- 『例解新国語辞典 第3版』(以下 例解)

4.3 調査手順

まず、調査語の選定を行った。調査語はハンドブックにて公開されている語の中から選出することとし、調査時に公開されていた語の中から、使用頻度が高いもの、加えて自動詞他動詞(以下、自他動詞)が対で公開されているものを選んだ。使用頻度の調査については、NINJAL-LWP for BCCWJを使用した。こちらでは、対象語を検索した際に頻度を表した値が出てくる。本研究では、単純ではあるがその値を考慮し、使用頻度の高かった「すすむ・すすめる」「のる・のせる」を取り上げることとする。

調査語また調査語の語義の整理後に、BCCWJにて調査語を語彙素検索にかけ、検索時に、ジャンルをそれぞれ「文学(芸術)」「社会科学」「自然科学」と分けた。検索結果の1-100までを調査範囲としたが、その際同一テキストから繰り返し使用されている文は対象から外した。また、複合語も今回の調査対象からは外した。

5. 「すすむ／すすめる」調査結果

5.1 語義の整理

「すすむ／すすめる」では「進む／進める」にあてはまる語義を使用する。まずは、ハンドブックとそれぞれの辞書の語義数で比較した。(表1)

表1 「進む／進める」語義数の比較

	ハンドブック	明鏡	三省堂	現代例解	新明解
進む	13	8	7	7	3
進める	7	5	5	5	2

語義数は、ハンドブックと新明解以外はすべて同じである。新明解は極端に語義数が少ないため、今回考慮しないこととし、ハンドブックと3つの辞書の語義を比較した。どの辞書でも、「進む」は10個前後、「進める」は5個であったので、おおむね全て対応しているように思えたが、語義の分け方は辞書によって異なる点もあったため、例文を比較し重なりあう部分を整理した。その結果、「進む」の語義は10個、「進める」の語義は5個と考えることとした。(表2・3)

表2 「進む」整理後の語義

語義番号	語義	例文
1	前方に移動する	暗闇の中を一歩ずつ進んだ (ハンドブック)
2	上の段階・地位に移行する	小学校から中学校へ進む (三省堂)
3	選択肢の中から進路を決めて、それを始める。	理系分野に進むことを決めた
4	物事が進行する	仕事が進む、工事が進む
5	物事の状態・程度が甚だしくなる	食欲が進む この薬があれば、病状が進むのを止めることができる (ハンドブック)
6	物事が好ましい方向に動く	文化の進んだ国 (三省堂)、開発が進む
7	自分からそうする気持ちになる	気が進まない (三省堂)
8	仕事がかどる	上司の的確な指導のおかげで、仕事が進む
9	時計の針を正しい時刻の先にする	この時計は5分進んでいる (ハンドブック)
10	時間が経過する	春から夏に季節は進んだ (ハンドブック)

表3 「進める」整理後の語義

語義番号	語義	例文
1	移動させる・前進させる	カウボーイは馬を谷のほうへと進めた (ハンドブック)
2	上の段階・地位に移行させる	努力の甲斐あって、花子は書道の段を進めた (ハンドブック)
3	物事を進行させる より高い段階へ推進させる	準備を進める、合理化を進める
4	程度・度合いが何らかの原因で高まる	暗いところの読書は、近眼をすすめる恐れがある (ハンドブック)
5	時計の針を先にいかせる	時計の針を5分すすめた

表4 「進む／進める」対応している語義

進む		進める	
語義番号	語義	語義番号	語義
1	前方に移動する	1	移動させる・前進させる
2	上の段階・地位に移行する	2	上の段階・地位に移行させる
4	物事が進行する	3	物事を進行させる より高い段階へ推進させる
6	物事が好ましい方向に動く		
5	物事の状態・程度が甚だしくなる	4	程度・度合いが何らかの原因で高まる
9	時計の針を正しい時刻の先にする	5	時計の針を先にいかせる

表5 「進む／進める」対応していない語義

進む	
語義番号	語義
3	選択肢の中から進路を決めて、それを始める。
7	自分からそうする気持ちになる
8	仕事がかどる
10	時間が経過する

5.2 「進む／進める」語義の対応

表2・3で示した語義の数からもわかるように、自動詞他動詞間で対応している語義と対応していない語義がある。対応している語義が6個で、対応していない語義は「進む」に4個あった。(表4・5)

「進む」の語義番号4・6は「進める」では一つの語義にまとめられていたため、語義番号3と対応することになる。

5.3 「進む」調査結果

まずは「進む」の分野別調査結果から見ていくこととする。図1は「進む」の語義のうち、他動詞と対応している語義の分野ごとの使用状況である。

文学では、基本義である語義番号1に使用が集中し、反対に語義番号2・5の使用はほとんど見られなかった。社会科学と自然科学では、文学のように一つの語義に使用が集中することはなく、どちらも語義番号4・5・6に分散する結果となった。

このことから、3分野共通で使用が見られた語義は語義番号4・6と言えそうである。また、2分野共通ではあるが、語義番号5も比較的使用が多くみられる語義と考えてよさそうである。

1：前方に移動する

例) 駅前通りを一直線に進む。(文学)

4：物事が進行する

例) 葬儀は、順調に進んだ。(文学)

構想実現に向けて、着々と準備が進んでいます。(社会)

この危機を脱しなければ、その治療は進まない。(自然)

5：物事の状態・程度が甚だしくなる

例) 「壊疽が、もっと先に進んでいるというのですか。」(文学)

高度に技術の進んだ国では、共通して人口の高齢化が進んでいる。(社会)

時がたつにつれて、病気の進み方が遅くなったのです。(自然)

6：物事が好ましい方向に動く

例) 小型車の設計は日本の方が進んでおります。(文学)

植民地時代にはヒル・ステーションの開発が進んだ。(社会)

医療器具の開発により、画像による診断技術が飛躍的に進んでいます。(自然)

また、「進む」の今回の調査では語義番号9の使用は3分野共通して確認できなかった。

9：時計の針を正しい時刻の先にする。

例) この時計は5分進んでいる。

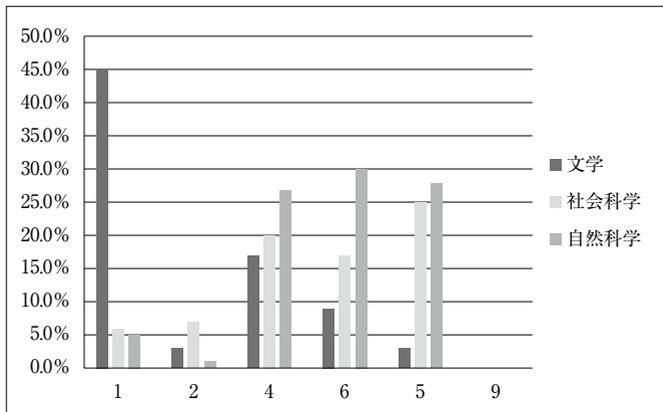


図1 「進む」 自他対応有の語義 分野別使用状況

次に、「進む」の語義のうち他動詞との対応が無かったものの使用状況を図2にまとめた。語義番号7では文学及び社会科学で10%以上、語義番号8では社会科学の使用が10%となり、比較的使用が多い語義と考えられるだろう。語義番号10は自然科学でわずかに使用が見られたが、その他2つの分野では使用は確認できなかった。

7：自分からそうする気持ちになる。

例) 気は進まないが無下に断るわけにもいかない。(文学)

破産は債権者の側から申し立てることもできるが、債務者がみずから進んで破産を申し立てることができる。(社会)

もしかしたらいいかもしれない、と進んで飲む気になりました。(自然)

10：時間が経過する。(例 春から夏に季節は進んだ。)

例) 年齢が進み、3歳ごろになると、(自然)

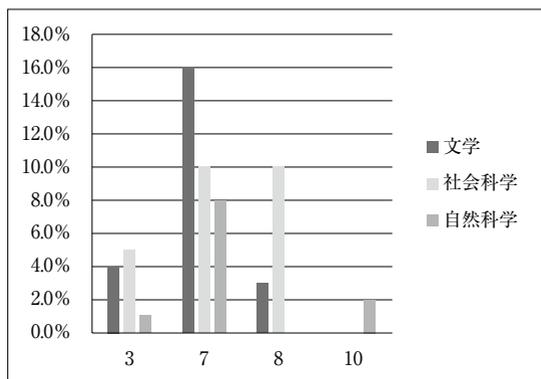


図2 「進む」 自他対応無の語義 分野別使用状況

5.4 「進める」調査結果

「進める」でもまずは分野別使用状況について述べる。図3は自他動詞間で対応がある語義の分野別使用状況を表したものである。なお、「進める」の語義の中で自他の対応が無いものはなかった。

これを見ると、明らかに語義の使用が語義番号3に集中しているのがわかる。基本義である語義番号1は文学で使用が見られたが、その他の2分野では使用は少なかった。語義番号5は3分野共通で、今回の調査では使用が見られなかった。

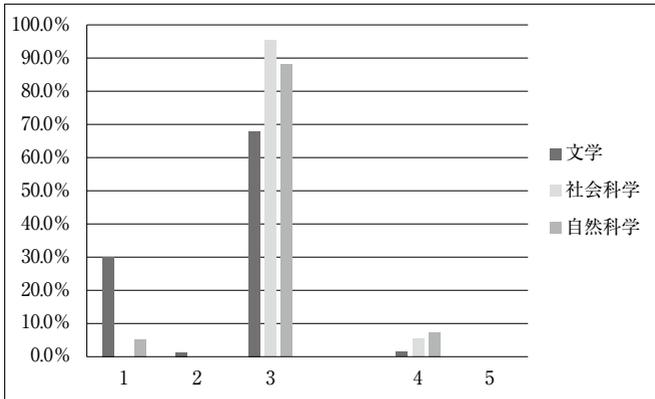


図3 「進める」自他対応有の語義 分野別使用状況

表6 2もしくは3分野共通で使用が見られた語義の自他別比較

進む		進める	
語義番号	語義	語義番号	語義
1		1	
2		2	
4	物事が進行する	3	物事を進行させる より高い段階へ推進させる
6	物事が好ましい方向に動く		
5	物事の状態・程度が甚だしくなる	4	
9		5	

3：物事を進行させる。／より高い段階へ推進させる。

例) 警察はその両面から捜査を進めているという。(文学)

日本はいつそう熱心に中央集権化を進めたのである。(社会)

微量取扱いであることを覚悟の上なら研究を進めてよい。(自然)

1：移動させる・前進させる。

例) ルチアは大きな岩を避けながら、深い方に足を進めた。(文学)

5.5 自動詞他動詞別に着目した分析

「進む」「進める」の自他対応がある語義のうち、2分野もしくは3分野で使用が共通して見られた語義を比較してみる。表6が語義を対応させたものになる。使用が見られなかった語義は空欄にしている。

「進める」では語義の使用が語義番号3に集中したことにより、「進む」では使用が多く見

られた語義でも「進める」では3分野共通しての使用が多くならなかった語義があった。例えば、「進む」語義番号5は社会科学で20%程度、自然科学で27%の使用があったが、「進める」語義番号4は社会科学で5%、自然科学で10%弱の使用があるだけであった。また、「進む」語義番号2（上の段階・地位に移行する。）と「進める」語義番号2（上の段階・地位に移行させる。）、「進む」語義番号9（時計の針を正しい時刻の先にする。）と「進める」語義番号5（時計の針を先にいかせる。）のように、対応している語義のどちらも使用がほとんど確認できなかった語義もあった。

「進める」語義番号3は、自動詞では2つの語義に分かれており、完璧に対称な語義とは言えないかもしれないが、どれも良く使用する語義であった。そのことから、「物事の進行／推進」という語義は「進む」でも「進める」でも多く使われる語義だと考えられるだろう。

さらに、「進む」の中で「進める」と対応していない語義のうち、語義番号7（自分からそうする気持ちになる。）が2分野において、使用が10%以上となり、自他対応がない語義でも注目するべきであると考ええる。

5.6 「進む／進める」まとめと考察

以上述べてきた調査結果より、分野別また自他動詞別の使用状況についてまとめておく。

まず、分野別の使用状況だが、「進む」では、文学での使用が多かった語義は、社会科学・自然科学では使用が少なく、反対に社会科学・自然科学で使用が多かった語義は文学では使用が少ないといった特徴があった。

これらのことから、「進む」では基本義である語義番号1（前方に移動する。）に加え、3分野共通で使用が見られた語義番号4（物事が進行する。）、2分野共通で使用が見られた語義番号5（物事の状態・程度が甚だしくなる。）・6（物事が好ましい方向に動く。）の4つの語義を理解、習得することは学習者にとって有効な事だと考える。

また、自他動詞の語義の対応という点から見ると、3点注目したい結果が見られた。「進む」では4つの語義に使用がばらけていたが、「進める」では一つの語義に使用が集中していた。また、対応していない4つの語義の中に、1つの分野以上で使用率が10%を超える語義が2個あった。そして、「進める」で使用が集中していた語義は「物事の進行」であり、基本義ではなかった。

対応していない語義にある程度の使用が見られたということは、自他動詞をただ単に形式的に覚えているのでは不十分だということを示唆しているのではないだろうか。形式的に覚えるというのは、自動詞は助詞の「が」をとり、他動詞は「を」をとる、という基本的な文法事項を覚えることを指すが、日本語学校の初級日本語クラスではこのような基本事項をしっかり定着させる教育が行われることが通常だと思われる。しかし、それだけで教育が終わってしまえば、形式を入れ替えれば自他動詞の交換は可能だと学習者に思わせてしまうかもしれない。語義によっては言い換えができないものがあるということは、学習者に示すべき点であると言える。

また、基本義ではない語義に使用が集中したということは、教師が学習者に提示しなければいけない情報であり、産出に繋がるように促さなければいけないことだと言える。

6. 「のる／のせる」調査結果

6.1 語義の整理

「のる／のせる」では、「乗る／乗せる」と「載る／載せる」の2種類がある。併用が可能なものもあるが、今回は「乗る／乗せる」を取り上げ、大きく意味が異なる「載る／載せる」は対象外とした。それぞれの語義数をまとめてみる。(表7)

「乗る」は、ハンドブック、明鏡、三省堂が似たような語義数であるが、「乗せる」はハンドブックだけが12個と若干多くなっていた。「乗る／乗せる」では、三省堂や明鏡を参考としながら判別のしにくい語義を整理し、極端に語義数の少なかった新明解は考慮しないこととした。「進む／進める」同様に、意味の重なる部分を例文で確認し、整理した結果「乗る」の語義数が11個、「乗せる」の語義数が9個と考えることとした。(表8・9)

表7 「乗る／乗せる」語義数の比較

	ハンドブック	明鏡	三省堂	現代例解	新明解
乗る	16	11	15	6	4
乗せる	12	8	7	6	1

表8 「乗る」整理後の語義

語義番号	語義	例文
1	上へのぼる、物の上に身をおく	子供が父親の背中に乗ってはしゃいでいる (ハンドブック)
2	乗り物の中に入る・乗り物を利用する	昨日初めて馬に乗った (ハンドブック) 歩かないで、バスに乗る
3	加わる・参加する	計画にのる (三省堂)
4	(感動・興奮して) 調子づく	素晴らしい演奏に聴衆もつてきた
5	勢いのまま進む	好調の波にのる (三省堂) 仕事に気がのる (新明解)
6	利用して効果を上げる	彼は入社後エリートコースにのって出世した
7	ひきこまれて、する気になる	誘いにのる (三省堂)
8	だまされる	口車にのる (三省堂) 儲け話に簡単に乗ってはいけない (ハンドブック)
9	調子がうまく合う	リズムにのる (三省堂)
10	それによって運ばれる	電波にのる (三省堂) 偉大な功績を残した人物の名が、メディアにのって世界中に広がっていった (ハンドブック)
11	ある基準以上になる	占有率が六割台にのる (三省堂)

表9 「乗せる」整理後の語義

語義番号	語義	例文
1	乗るようにさせる	娘を膝にのせて本を読んでやる (ハンドブック)
2	なかまに入れる・参加させる	一口乗せてほしい (三省堂)
3	人が、ものを別のものに加える	日本製品を海外で売るには、「日本製」ということに価値を乗せられるかがポイントだ (ハンドブック)
4	(感動・興奮させて) 調子づかせる	聴衆をのせる (三省堂)
5	相手をこちらの思うとおりに動かす・あざむく	たくみな宣伝にのせられた (三省堂)
6	調子に合わせる	メロディーにのせる (三省堂)
7	それによって運ぶ	電波にのせる (三省堂)
8	勢いを加える	スピードをのせる (三省堂)
9	ある基準以上になる	利益を五千万台にのせる (三省堂)

6.2 「乗る／乗せる」語義の対応

次にそれぞれの語義の対応を見ていくこととする。「乗る」では語義を11個に分けたが、そのうち他動詞「乗せる」と対応している語義は9個、対応していない語義が2個であった。また、「乗る」の語義番号1・2は「乗せる」では語義番号1、つまり一つの語義に対応していることになっている。自他動詞の対応がなかったものは、「乗る」では2個、「乗せる」では1個であった。(表10・11)

6.3 「乗る」調査結果

まず、分野別の使用状況から見ていく。「乗る」の自他対応がある語義の分野別使用状況は図4のとおりである。また、「乗る」については文学と社会科学では100件のサンプルを集めることが可能だったが、自然科学ではコーパスで検索し、同じ文献のものや、同じ文の中で繰り返して使用されているものを対象から外した結果、92件しかサンプルが集まらなかった。

図4のとおり、3分野共通での使用が見られたのは語義番号2(乗り物の中に入る・利用する)であった。どの分野でもこの語義に40%以上、文学に至っては70%弱の使用があったため、その他の語義の使用率は高く15%~20%となっていた。

2：乗り物の中に入る・乗り物を利用する

例) ひと月の間に二度も救急車に乗ることになった。(文学)

スクーターで通勤し、得意先回りも、スクーターに乗って一人で行く。(社会)

早めに家を出れば、乗る電車も違ってくる。(自然科学)

表10 「乗る／乗せる」対応している語義

乗る		乗せる	
語義番号	語義	語義番号	語義
1	上にのぼる、物の上に身をおく	1	乗るようにさせる
2	乗り物の中に入る・乗り物を利用する		
3	加わる・参加する	2	なかまに入れる・参加させる
4	(感動・興奮して) 調子づく	4	(感動・興奮させて) 調子づかせる
5	勢いそのまま進む	8	勢いを加える
8	だまされる	5	相手をこちらの思うとおりに動かす・あざむく
9	調子がうまく合う	6	調子に合わせる
10	それによって運ばれる	7	それによって運ぶ
11	ある基準以上になる	9	ある基準以上になる

表11 「乗る／乗せる」対応していない語義

乗る		乗せる	
語義番号	語義	語義番号	語義
6	利用して効果を上げる	3	人が、ものを別のものに加える
7	ひきこまれて、する気になる		

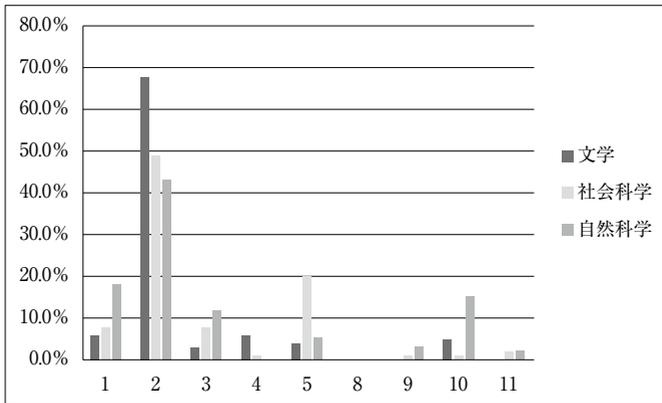


図4 「乗る」自他対応有の語義 分野別使用状況

そのほか、2分野での共通を見てみると、語義番号1（上に上る、物の上に身を置く）や、語義番号3（加わる・参加する）では、社会科学と自然科学が10%弱～20%弱となっており、文学に比べ高いと言える。

1：上へのぼる、物の上に身をおく

- 例) 枯れ木に乗っている娘も恥ずかしそうに笑っていた。(文学)
危ないので長くつかスリッパをはいて畳に乗りました。(社会)
一定のスピードで回転する走行盤の上に乗る。(自然)

3：加わる・参加する

- 例) ここでは信者の個人的な相談に乗ったり、聖書を読んだりする。(文学)
実現するために必要なことはすべて相談に乗ることができる。(社会)
そんな医師なら、あなたのどんな病気にも相談のってくれます(自然)

さらに、共通した使用ではないが、10%以上の使用が見られたものも確認しておくべきであろう。社会科学で20%の使用がある語義番号5（勢いのまま進む）や、自然科学で15%程度の使用が見られた語義番号10（それによって運ばれる）である。

5：勢いのまま進む

- 例) この一見効率的な流れにのって、日本の産業は急速な発展を遂げてきた。(社会)
いわば日本は、世界の潮流に乗るようになった。(社会)

10：それによって運ばれる

- 例) 動脈の血液にのって運ばれる。(自然)
それらがやがて風や波にのって打ちあがります。(自然)

一方、どの分野においても使用が確認できなかった語義もある。語義番号8（だまされる）は、今回の調査では3分野で0%、語義番号9（調子がうまく合う）や語義番号11（ある基準以上になる）は、文学ではどちらも0%、社会・自然科学では3%未満となった。

8：だまされる。(例 口車に乗る。／儲け話に簡単に乗ってはいけない。)

9：調子がうまく合う。(例 リズムにのる。)

11：ある基準以上になる。(例 占有率が六割台にのる。)

また、「乗る」には他動詞「乗せる」と対応していない語義が2個あった。語義番号6（利用して効果を上げる）と語義番号7（引き込まれてする気になる。）である。これらの語義は、

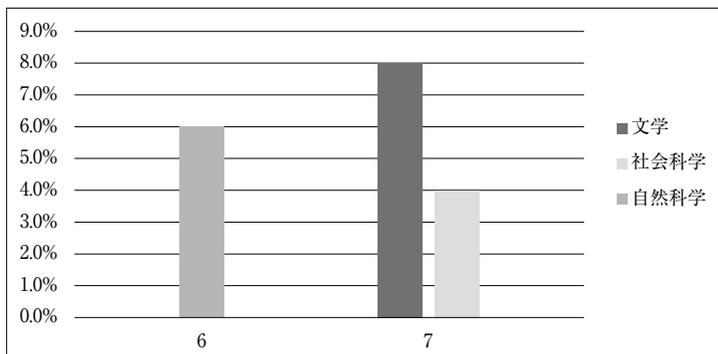


図5 「乗る」自他対応無の語義 分野別使用状況

どの分野でも10%以下の使用であったが、自然科学ではどちらも0%であった。(図5)

語義番号6は文学、自然科学では使用が確認できず、社会科学のみ6%の使用であった。語義番号7は文学での使用が8%、社会科学での使用が4%であった。自然科学の使用は確認されなかった。

6：利用して効果を上げる。

例) 相手の論理に乗る形でそれ以上の論理で問題点を指摘した。(社会)

それが企業内での出世コースに乗ることなのだ。(社会)

7：ひきこまれた、する気になる。

例) むろん氏康からは、憲政らの誘いにのらぬよう、釘は打ってあった。(文学)

リンゼイはギルの思惑にのってしまいたかった。(文学)

この団体の最強部がこうした誘導にのったかという問題がある。(社会)

6.4 「乗せる」調査結果

9個ある語義の中で、自他対応がある語義は8個であった。次の図6にそれぞれの分野別使用状況を示す。また、「乗せる」でも、「乗る」同様に文学と社会学では100件のサンプルが集まったが、自然科学では56件のみとなってしまった。

「乗せる」では、基本義である語義番号1(乗るようにさせる)に使用が集中し、文学と自然科学では90%を超えた。社会科学では、語義番号8に10%弱の使用が見られただけであった。

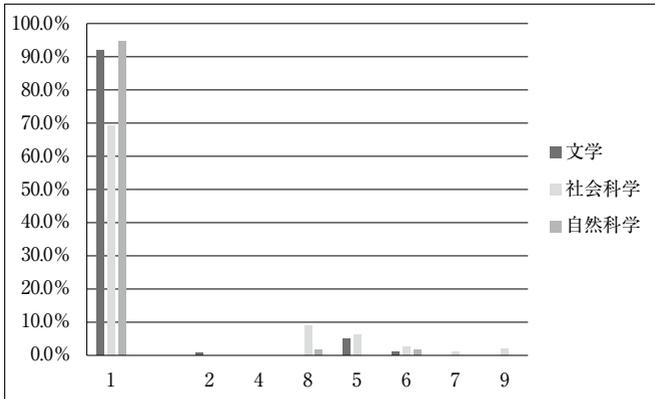


図6 「乗せる」自他対応有の語義 分野別使用状況

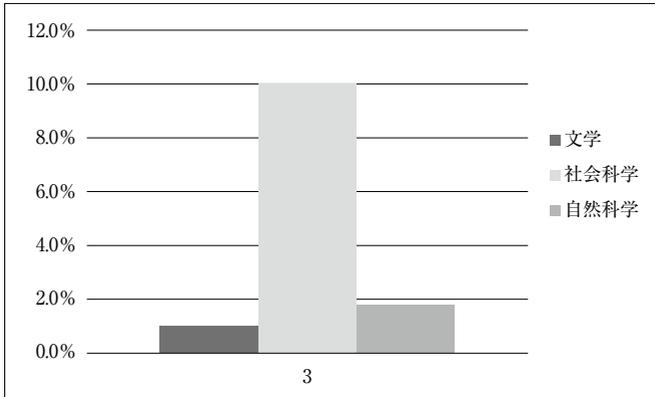


図7 「乗せる」自他対応無の語義 分野別使用状況

1：乗るようにさせる。

- 例) 信号がかわって、彼を厚木から乗せてきたトラックが発進するとき。(文学)
 山高帽を頭に乗せた姿に決めてなかなかのしゃれ者でした。(社会)
 背すじを伸ばして片手を頭に乗せ、息を吐きながら首を横に倒します。(自然)

8：勢いを加える

- 例) 将来の見通しを明確にしたり、販売ルートを軌道に乗せたりする。(社会)
 我が国経済を新たな成長軌道にのせていく。(社会)

では、「乗せる」の自他対応がない語義はどうであろうか。自他の対応がない語義は1個

だけであり、図7のような結果となった。

これを見る限り、社会科学では10%程度の使用があることがわかる。そして、語義全体で見ると、語義番号1に続いて2番目に使用が多かった語義となる。

3：人が物を別のものに加える。

例) 作品の主題歌のメロディーに自分の読みをのせる。(社会)

それに必要な利益をのせて売る。(社会)

6.5 自動詞他動詞に着目した分析

以上述べたような分野別に使用が多かった語義が、自動詞他動詞間も対応するかを見てみた。それが表12である。「乗る」では語義番号2に、「乗せる」では語義番号1に使用が大変集中したことから、3分野の中で語義の使用が10%程度あった語義も、今回は使用が多かった語義として考えることとした。

これを見ると、基本義にあるような、自動詞の「上にのぼる、乗り物に乗る」と他動詞の「乗るようにさせる」というものは、どちらの場合も使用が多いことがわかる。また、自動

表12 自他対応有の語義のうち使用が多かった語義

乗る		乗せる	
語義番号	語義	語義番号	語義
1	上にのぼる、物の上に身をおく	1	乗るようにさせる
2	乗り物の中に入る・乗り物を利用する		
3	加わる・参加する	2	
4		4	
5	勢いのまま進む	8	勢いを加える
8		5	
9		6	
10	それによって運ばれる	7	
11		9	

表13 自他対応無の語義のうち使用が多かった語義

乗る		乗せる	
語義番号	語義	語義番号	語義
6		3	人が、ものを別のものに加える
7	ひきこまれて、する気になる		

詞「勢いのまま進む」と他動詞「勢いを加える」も、自動詞の場合も他動詞の場合も使用があることがわかる。一方で、メディアに乗って世界中に広がる、のような文があてはまる語義番号10(それによって運ばれる)は、他動詞の「乗せる」ではあまり使用が確認されなかったことから、「乗る／乗せる」でも自他動詞で対応する語義でも同じような頻度での使用ではない可能性が示されている。

自他動詞間で対応していない語義についてだが、「乗る」でも「乗せる」でも10%程度の使用があったものがある。(表13)これらは3分野共通で使用が見られたわけではなく、「乗る」語義番号7では文学で8%、「乗せる」語義番号3では社会科学で10%の使用が見られた。

6.6 「乗る／乗せる」まとめと考察

以上述べてきた調査結果より、分野別また自他動詞別の使用状況についてまとめておく。まず分野別の使用状況では、「乗る」でも「乗せる」でも最も使用が多かった語義に使用が集中していたため、「乗る」では2分野共通で使用が多く見られたものはあまりなく、3つの分野それぞれで10%~20%程度の使用が見られる語義が異なった。「乗せる」に関しては、最も使用が多かった語義以外で10%以上になったものはどの分野でもなかった。それを考えると、「乗る」では3分野共通で使用が多かった、語義番号2(乗り物の中に入る)、2分野共通で使用が見られた語義番号1(上にのぼる)及び3(加わる・参加する)、1つの分野でしか使用は見られなかったが10%位以上の使用があった語義番号5(勢いそのまま進む)や10(それによって運ばれる)といった、5つの語義を学習者が学ぶべき重要な語義だと考える。「乗せる」では、3分野共通で使用が集中した語義番号1(乗るようにさせる)、社会科学のみであるが10%程度の使用があった語義番号3(人がモノを別の者に加える)及び8(勢いを加える)が、重要な語義だと考える。また、「乗る／乗せる」では基本義や基本義に近い語義に使用が集中したというのも特徴である。

自他動詞間の語義の対応という点から考えると、自他動詞間で対応する語義であっても、自動詞「乗る」では使用が見られたが、他動詞「乗せる」では使用が見られないものがあった。さらに、自他動詞間で対応していない語義にもある程度使用される語義があった、という2点が注目すべき点だと言えよう。また、「乗る／乗せる」では基本義の使用が最も多かった。そして、それは自動詞でも他動詞でも同様であったことから、「乗る／乗せる」では、まずは基本義とそれに近い語義を学習者は習得する必要があると言える。しかし、対応していないけれどもある程度使用が見られる語義は派生義であったため、中級以降に学習者が授業などで触れる可能性が高い。そのような語義は、語の意味だけでなく、文脈の中での語義や共起表現、そして自動詞もしくは他動詞で言い換えることはできないのだということを教師は教育しなければいけないだろう。

7. まとめ／今後の課題

分野別使用状況についてまとめると、「進む／進める」のうち、特に「進む」で文学での

使用が多かった語義は、社会科学・自然科学では使用が少なく、反対に社会科学・自然科学で使用が多かった語義は文学では使用が少ないといった特徴があった。しかし、「乗る／乗せる」にはそのような特徴は見られず、どの分野でも使用語義が一つに集中し、2分野での共通などはあまりなかった。このことから、分野別に使用状況の違いや特徴が見られるかは語によって変わるのだと考えられる。

自他動詞の語義の対応について考えると、どちらの調査でも、まず対応していない語義があること、対応していても使用頻度は異なることがあること、さらには対応していない語義に使用が多く見られる場合があることがわかった。このことから、特に中級以降の自他動詞の教育では、教師は語義についても考慮し学習者に示す必要性が示唆された。

本研究では、分野別・自他動詞別という大きな2つの観点から語義の使用状況を見てみたが、どちらも共通して言えるのは、語義の使用頻度には偏りがあり、教師は優先順位を付けられるのではないかということだ。「何を授業で取り扱うべきなのか、授業で説明するべきなのか」を考える第一歩となることを期待し、今後はどのように授業に取り入れていけるのかを考えたい。また、今回の調査では、サンプル数や書き言葉だけの調査になってしまったことなど、不十分な点もある。また、自他動詞間での言い換えにおいて、実際の学習者の誤用の中に語義的に解決できるものがあるかどうかとも調査したほうが良いと思われる。もし、実際の誤用にそのような点があれば、教師が教育するべきものとして、授業にどのように取り込むか考えることも今後の課題としたい。

参考文献

【辞書】

- 上野善道他著 (2017) 『新明解国語辞典』第七版特装青版 三省堂
北原保雄 (2010) 『明鏡国語辞典』第二版 大修館書店
見坊豪紀他編 (2013) 『三省堂国語辞典』第七版 三省堂
林四郎他編 (1991) 『例解新国語辞典』第三版 三省堂
松井栄一監修 (2016) 『現代国語例解辞典』第五版 小学館

【文献】

- (1) 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形—自・他動詞の対応—」『動詞の自他』ひつじ書房、57-81.
- (2) 玉村文郎 (1992) 「第3章4. 語義」玉村編『日本語学を学ぶ人のために』世界思想社、111-122.
- (3) 田丸淑子 (1998) 「語彙に焦点をあてた授業：非漢字系中級中・後期日本語学習者の場合」『Working papers on language acquisition and education』9巻、78-87.
- (4) 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版、303-317.
- (5) 沼田善子 (1989) 「日本語動詞 自・他の意味的対応 (1) : 多義語における対応の欠落から」『研究報告集』10、193-215.
- (6) 早津恵美子 (1987) 「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語研究』6、79-109.
- (7) 早津恵美子 (1989) 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて—意味的な特徴を中心に—」『言語研究』95、231-256.
- (8) 森山仁美 (2015) 「文脈における和語動詞語彙の産出」『日本語教育』161号、2-14.

- (9) 「基本動詞ハンドブック」〈<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/headwords>〉 (2018年 9 月24日)
- (10) 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」〈http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/〉 (2018年 9 月24日)
- (11) 「NINJAL-LWP for BCCWJ」〈<http://nlb.ninjal.ac.jp/>〉 (2018年 5 月29日)